

中澤 光平², セリック ケナン², 麻生 玲子²

(国立国語研究所)

要旨

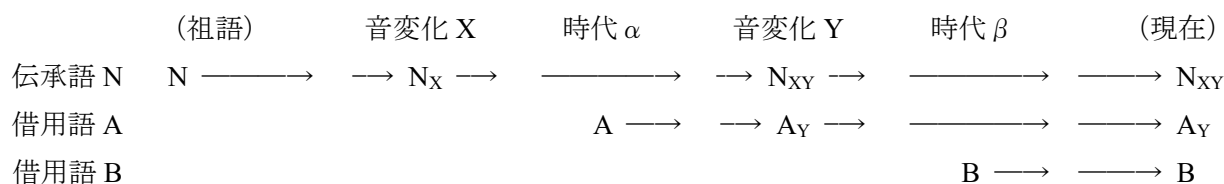
本発表の目的は、南琉球諸語に見られる漢語について、音対応をもとに漢語の借用時期および音変化の相対年代を推定し、客観的な指標によって借用時期の違いを提示することである。筆者らが構築している琉球諸語の語彙データベースと本発表用の調査結果をデータとして用い、南琉球諸語に分布し、かつ南琉球諸語に起きている音変化を被りうる分節音を含むことを条件に選定した 125 語の漢語を分析対象とした。南琉球諸語（宮古・石垣・鳩間・波照間・与那国）の各方言に生じた音変化を考察した結果、漢語群に 3 つの借用年代層 1~3 が認められ、層 1 は（南）琉球祖語に遡り、層 3 は琉球王国の版図に組み込まれて以降の時代、層 2 は層 1 と層 3 の間にあたる時代と推定されることを示した。今回の結果をもとに、音変化の情報を充実させ、データベースを拡充することで、借用時期の推定の精度が向上することが期待される。

1. はじめに

本発表では、南琉球諸語に見られる漢語について、音対応をもとに漢語の借用時期および音変化の相対年代を推定し、客観的な指標によって借用時期の違いを提示することを目的とする。

音韻史は言語史研究の基礎と言えるが、音韻史で重要な問題に、音変化の相対年代の推定がある。音変化がどのような順で生じたかは、言語内の証拠から判明することもあるが、推定が困難な場合も少なくない。狩俣（2008）は、南琉球に広く観察される *ku > f, *ku > φu の摩擦音化を、「おおくの共通点があ」りながらも、「他の音韻変化との整合性などがことなる」ため、「共通祖方言にはさかのぼらない変化」と指摘している（p.9）。音変化間に供給（feeding）や奪取（bleeding）の関係が見られれば通時変化の順序が推定できるが、そのような関係が常に認められるとは限らない。音変化の順序を推定する別の手掛かりに借用語がある。伝承語³は定義上その言語が経験した全ての音変化を被るため、音変化の相対年代がはっきりしないことがあるのに対し、借用語は借用以前に生じた音変化の影響はないはずなので、借用語に生じていない音変化があれば、その変化は相対的に古く、その他の変化は新しいと言える。

(1) 伝承語と借用語のモデル



(1) において、伝承語 N は音変化 X, Y 両方を経験するのに対し、時代 α に借用された借用語 A はそ

¹ 本研究は以下の支援を受けています：国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」（代表：木部暢子）、新学術領域研究「日本語と関連言語の比較解析によるヤポネシア人の歴史の解明」（18H05510；代表：遠藤光暁）、若手研究「日本の消滅危機言語を対象とした大量の言語資料収集・蓄積方法に関する基礎研究」（18K12390；代表：麻生玲子）、同「南琉球宮古語の語彙体系の多様性を探る：通方言的な音声付の語彙データベースの構築」（19K13174；代表：セリック ケナン）、新学術領域研究（研究領域提案型）公募研究「南琉球八重山諸語における伝播過程の解明と言語系統樹の構築」（19H05353；代表：麻生玲子）。

² k.nakazawa@ninjal.ac.jp（中澤）、kcelik@ninjal.ac.jp（セリック）、r_aso@ninjal.ac.jp（麻生）

³ 上野（2006: 5）に倣い、借用語でない語を本発表ではこのように呼ぶことにする。

れより前に生じた音変化 X を経験せず、Y は経験する。同様に、時代 β に借用された借用語 B はそれより前に生じた音変化 X, Y とともに経験しない。言い換えれば、借用語 A と借用語 B に生じた音変化を観察することで、音変化 X, Y がこの順に生じたことがわかる。

日琉諸語にも様々な借用語があるが、中国から入ってきた漢語は他の借用語より数が多い。日本に漢字が伝わったのとほぼ同時期に漢語も日本語に入ってきたと考えられる。上代にも「塔^{たふ}、力士^{りきじ}、餓鬼^{がき}、双六^{すくろく}、法師^{ほふし}」など若干の漢語が見られる（沖森・肥爪 2017: 2）ように、古くから漢語は徐々に日本語の中にも浸透していたから、借用時期には幅があった。時期の違いを示す代表的なものに呉音と漢音の音読みの違いがある。呉音は漢音よりも古い時代の漢字音を反映しており、呉音の漢語は漢音のものより相対的に古い時代に入ってきたことがわかる。その他にも、方言間の対応に基づく漢語の借用時期と音変化の相対年代の研究として、日本語諸方言での漢語のアクセント対応の規則性から日本語諸方言のアクセント変化が「味噌」が入ってきた時代と「茶」が入ってきた時代の間だと主張した金田一（1980）、沖縄首里方言における日本語 ke-, ge- との対応から、沖縄首里方言に A 時代、B 時代、C 時代の 3 つが区別されることを指摘した服部（1978, 1979）がある。

(2) A 時代、B 時代、C 時代に沖縄首里方言に入った漢語の例（服部 1979 より一部抜粋）

A 時代 *ciku* [tʃiku] 「菊」、*sici* [ʃitʃi] 「式」、*sjuuzi* [ʃu:dʒi] 「祝儀」、*nanzi* [nandʒi] 「難儀」、…

B 時代 *cibjoo* [tʃibjo:] 「仮病」、*ciiku* [tʃi:ku] 「稽古」、*ziinuu* [dʒi:nu:] 「芸能」、…

C 時代 *sikin* [ʃikin] 「世間」、*kagin* [kagin] 「加減」、…

このように、漢語は日琉諸語の音韻史を探るのに有用な一方、首里・那覇方言以外の琉球諸語、とりわけ南琉球諸語における漢語を扱った研究は、かりまた（2012）に若干言及されている程度で極めて少ない。しかし、首里方言ほどではないものの、ある程度の数の漢語語彙は南琉球諸語にも見られ、さらにそこには複雑な音対応が観察される。このことは、南琉球において、漢語の音韻研究が、音変化の相対年代を明らかにするのに役立つ可能性を示している。そのため本発表では、南琉球諸語の漢語語彙について、辞書などのデータおよび現地調査データから複数地点で例を収集し、方言ごとの音対応を整理し、方言間での結果を比較・総合し、漢語が南琉球諸語へ借用された時期を推定することを試みる。

2. データと方法

2.1 データ

本研究で使うデータは発表者らが構築中の琉球諸語の語彙データベース（以下「RDB」）による⁴。RDB は南琉球を中心に琉球諸語の既存の辞典（10 冊）や語彙資料（44 本）の電子化データと発表者らが収集している調査データから構成され、現時点では 237069 語を収納している。なお、収納している各語に対して、同源性のタグ（祖語 ID）を付与しており、現在は 57900 語のタグ付け作業が完了している。同源語が同じ祖語 ID で紐づけられているため、大規模な比較作業が簡単にできる。

さらに、RDB のデータに加えて、3 地点（宮古語与那覇方言、八重山語波照間富嘉方言、八重山語与那国方言）について対象となる漢語のアクセント調査を行い、アクセント情報を追加した。話者情報は次の通りである。与那覇方言：垣花讓二さん（昭和 23 年生男）、波照間方言：本田昭正さん（昭和 10

⁴ RDB のもととなったデータの一部には、琉球大学の狩俣繁久先生からご提供いただいたものを含みます。ここに感謝申し上げます。

年生男), 与那国方言: 崎原用能さん (昭和 22 年生男)。調査は漢語のリストを話者に送付し, リストの読み上げ音声を録音してもらい, 録音ファイルを返送してもらった。録音ファイルの分析とアクセント型の特定は発表者らによる。

2.2 方法

南琉球諸語に分布し, 南琉球諸語に起きている音変化を被りうる分節音を含むことを条件に, 125 語の漢語を選定した (リストは【資料】として比較に使った再建形と共に本稿の末尾に掲載する)。これらの漢語の祖語 ID を使い, RDB から南琉球の各地点の語形とその情報を自動的に抽出した。RDB のすべての語彙に対するタグ付け作業は完了していないため, ギャップについて必要な箇所は文献で直接確認し, データを補った。なお, 調査で得られた語彙データとアクセント情報を加えた。

まず, 南琉球諸語のそれぞれの地点について, 祖語に遡る伝承語において起こった音変化をまとめた。次に, 選定した漢語の「古さ」と「新しさ」の基準になりうる変化を特定した。例えば, 宮古諸方言では, *ku > fu の規則的な音変化が起きている (3) が, 宮古諸方言に分布する, その再建形が *ku を含む漢語は 2 つの語群に分かれる。すなわち, 伝承語と同様に *ku が fu になっている語群と, *ku が ku のままである語群がある (4)。この 2 つの語群の形成は借用時期の違いで説明できる。すなわち, 変化を示している語群は借用時期が *ku > fu の変化に先立っている。これに対して, 変化を示していない語群は借用時期が *ku > fu の変化より遅れている。このように, 宮古諸方言における *ku > fu の変化が漢語借用時期の新古を示す一つの基準となる。

(3) 宮古諸方言の伝承語における *ku > fu の変化の例: *fumu* < **kumo* 「雲」, *fum-* < **kum-* 「汲む」, *afuta* < **akuta* 「芥」 (与那覇方言形)

(4) 宮古諸方言における *ku を含む漢語例 (与那覇方言形)

- a. *ku :: fu : *sajafu* < **saiku* 「細工」, *jafu* < **jaku* 「厄」
- b. *ku :: ku : *duku* 「毒」, *pjaku* 「百」, *mjaku* 「脈」

続いて, それぞれの地点における各漢語に対して, その地点について特定した基準を用いて「新古」のスコアを計算した。具体的にいうと, 再建形に対して音変化が起きていれば「0」のスコアを, 音変化が起きていなければ「1」のスコアを与えた。同じ分節音に対して複数の変化があった場合 (例えば, *ku > fu の後に *k > g) は, 音変化ごとに分けて「新古」に応じた「0」と「1」のスコアを与えた。(3) の例でいうと, *jafu* < **jaku* 「厄」には *ku > fu という基準が当てはまり, その「新古」のスコアは「0」である。これに対して, 同じ基準が当てはまる *pjaku* < **pjaku* 「百」は「1」となる。

以下, 新古のスコアを元に考察を行っていくが, 本発表では, アクセント情報のある南琉球の代表的な方言 (宮古語与那覇方言, 宮古語多良間方言, 八重山語石垣方言, 八重山語鳩間方言, 八重山語波照間方言, 八重山語与那国方言) を中心に論じる。

3. 結果

分析結果について, 各方言ごとに整理する⁵。

⁵ 方言形は斜体で示し, 音形は各方言とも音声表記 (IPA) に近い表記に統一し, [] や // は省略した。古は音対応が見られることを, 新は音対応が見られないことを表す。

3.1 宮古諸方言

宮古諸方言（多良間方言・与那覇方言）では次の音対応が新古判断の基準として利用できた⁶。

- (5) a. *-au# :: -a# (例: *sɪmq* < **sumau* 「相撲」)
古: 砂糖 (*ɛata*), 水囊 (*ci:nɑ*), 芭蕉 (*basɑ*) [多良間], … 新: 根性 (*kundzau*), 焼香 (*ɛu:kau*), …
- b. *ai :: a₁ (例: *a₁* < **ai* 「藍」)
古: 米 (*ma₁*) 新: 位牌 (*ipai*), 五体 (*gutai*), 次第 (*sɪdai*), 代 (*dai*), 大事 (*daidzɪ*), …
- c. *ku :: fu (例: *ifutsɪ* < **ikutu* 「幾つ」)
古: 細工 (*ɛe:fu*), 厄 (*ja:fu*) 新: 菊 (*kiku*), 嫡子 (*teakusɪ*), 徳 (*tuku*), 毒 (*duku*), …
- d. *ou :: u (例: *kɪnu* < **kinou* 「昨日」)
古: 灯籠 (*tu:l*), 土用 (*duju*), … 新: 上等 (*dzo:to:*) [与那覇], 勝負 (*ɛo:bu*) [与那覇], …
- e. *au :: au (例: *paukɪ* < **pauki* 「箒」)
古: 正月 (*ɛaugatsɪ*), 相談 (*saudan*), 上納 (*dzaunu:*), … 新: 学校 (*gakko:*), 後生 (*guco:*), …
- f. *Ci :: C₁ (例: *sakɪ* < **saki* 「先」)
古: 大事 (*daidzɪ*), 次第 (*sɪdai*), 嫡子 (*teakusɪ*), … 新: 菊 (*kiku*), 義理 (*giri*), …

(5a, b, e) の対応が見られなくても (5f) の対応は見られる語があることから、宮古語諸方言では (5f) の変化が相対的に新しいと考えられる。そのため、(5f) が生じていない語が最も新しく宮古諸方言に入ったと推定される。

3.2 石垣（四箇）方言

石垣方言では次の音対応が新古判断の基準として利用できた。

- (6) a. *-au# :: -a# (例: *simɑ* < **sumau* 「相撲」)
古: 砂糖 (*satta:*), 包丁 (*po:dza:*) 新: 根性 (*kundzɔ:*), 上納 (*dzo:no:*), 天井 (*tindzɔ:*), …
- b. *ku :: φu (例: *aφu* < **aku* 「灰汁」)
古: 細工 (*saiφu*), 厄 (*jaφu*) 新: 菊 (*tsjku*), 公界 (*kugai*), 苦勞 (*kujo:*), 癩 (*faku*), …
- c. *-g- :: -ŋg- (例: *kangɑŋ* < **kagami* 「鏡」)
古: 生姜 (*songɑ:*), 正月 (*foŋwadzi*), 道具 (*do:ŋgu*), … 新: 公界 (*kugai*), 地獄 (*dziguku*)
- d. *Ci :: C_i (例: *sak_i* < **saki* 「先」)
古: 風儀 (*φuŋgi*), 次第 (*sɪndai*), 嫡子 (*tɪkusi*), … 新: 義理 (*giri*), 吟味 (*gimmi*), …

tɪkusi 「嫡子」のように、(6b) の変化が見られなくても (6d) の対応は見られる語があることから、石垣方言では (6d) の変化が相対的に新しいと考えられる。

3.3 鳩間方言

鳩間方言では次の音対応が新古判断の基準として利用できた。

- (7) a. *-au# :: -a# (例: *fima* < **sumau* 「相撲」)
古: 砂糖 (*sɑta*), 精霊 (*so:raŋ*), 芭蕉 (*basɑ*), … 新: 根性 (*kundɛo:*), 上納 (*dzo:no:*), …

⁶ 例は多良間方言形。「[多良間]」は多良間方言にのみ、「[与那覇]」与那覇方言にのみ見られる対応。

b. *ku :: ϕ u (例: $a\phi u > *aku$ 「灰汁」)

古: 厄 ($ja\phi u$) 新: 菊 ($kiku$), 苦勞 ($kujō$), 細工 ($sai ku$), 地獄 ($dziguku$), 癩 ($saku$), …

(7a) と (7b) の相対年代については、今回のリストでは分布が重なっていないため判断できない。

3.4 波照間方言

波照間方言では次の音対応が新古判断の基準として利用できた。

(8) a. *-au# :: -a# (例: $sqa^7 < *sibau$ 「相撲」)

古: 砂糖 ($sata$), 芭蕉 ($ba:sa$), 包丁 ($pottsā$) 新: 焼香 ($jo:ko$), 辣韭 ($dakkjō$), …

b. *ku :: fu (例: $a:fu < *aku$ 「灰汁」)

古: 厄 ($ja:fu^8$) 新: 細工 ($se:gu$), 毒 ($dugu$), 百 ($pja:gu$), 脈 ($mjagu$), 欲 ($jugu$), …

c. *ai :: e: (例: $ke < *kai$ 「卵」)

古: 細工 ($se:gu$), 大事 ($de:zi$), 米 ($me:$), 厄介 ($jakke:$), … 新: 次第 ($jidai$), 挨拶 ($aisatfi$)

d. *Cwa :: Co(:) (例: $konji^9 < *kwa:ge$ 「桑木」)

古: 正月 ($sagotfi$), 菓子 ($ko:fi:$), 薬缶 ($jakkō$) 新: 果報 ($kafu$)

e. *-k- :: -g- (例: $naga < *naka$ 「中」)

古: 細工 ($se:gu$), 大工 ($de:gu$) 毒 ($dugu$), … 新: 焼香 ($jo:ko:$), 弥勒 ($miruku$), …

*ku について, (8b) が適用されずに (8e) が適用される例があることから, (8b) の変化が古く, (8e) が新しいと考えられる。

3.5 与那国方言

与那国方言では次の音対応が新古判断の基準として利用できた。

(9) a. *-au# :: -a# (例: $tima < *sumau$ 「相撲」)

古: 砂糖 ($sata$), 上納 ($duna$), 包丁 (ϕuta) 新: 根性 ($kundu$), 精霊 ($suru$), 芭蕉 ($basu$), …

b. *-k- :: -g- (例: $naga < *naka$ 「中」)

古: 癩 ($sagu$), 大工 ($daigu$), 徳 ($tugu$), … 新: 嫡子 ($sakutfi$), 毒 ($duku$), 弥勒 ($niriku$), …

c. *C₁i :: C₂i (*gi > di, *si > tji, *pi > tji) (例: $tima < *sima$ 「島」, $tifi < *pi$ 「火」など)

古: 風儀 (ϕudi), 菓子 ($kwatfi$), 師匠 ($tifisu$), … 新: 義理 ($giri$), 吟味 ($gimmi$), …

d. *-tu :: -ti (例: $kumuti < *kumotu$ 「供物」)

古: 挨拶 ($aisatfi$), 正月 ($sunatfi$), 書物 ($sunuti$), … 新: 念仏 ($mimbutfi$), 理屈 ($dikutfi$), …

「師匠」や「嫡子」のように (9a, b) が生じていないのに (9c) が生じている語があるから, (9a, b) が相対的に古く, (9c) が相対的に新しい変化と推定される。(9d) は伝承語に確例がなく (例: $itfi < *itu$ 「何時」, $natfi < *natu$ 「夏」, $hatfi < *patu$ 「初」), 借用語にのみ生じた新しい変化と考えられる¹⁰。

⁷ 平山編 (1988) より。

⁸ 平山編 (1988) より。

⁹ 狩俣 (2008) より。

¹⁰ 伝承語の tji と $mimbutfi$, $dikutfi$ などの tji は音変化の経緯が異なると考える (伝承語の *tu は恐らく *su に転じ ti への変化を免れた)。さらに時代が下ると $impitsu$ 「鉛筆」, $kutsu$ 「靴」のように tsu が対応する。

4. 方言間の結果の統合と相対年代

3 節の結果から、各方言で音変化および漢語の借用時期に違いがあることが分かった。さらに、方言ごとの「新古」の情報を注目すると、「砂糖」、「包丁」などは全ての方言で「古」に入る一方¹¹、「弥勒」、「理屈」などは全ての方言で「新」に分類されているなど類似の傾向を示す。そのため、南琉球諸語に各漢語語彙が借用された時期はほぼ同じと仮定する。この前提のもとに、本節では、方言ごとの「新古」の基準を使った「総合新古スコア」について考察を簡単に行う。

各語について、各地点の「新古」の平均を取って総合新古スコア (S) を計算した。総合新古スコアは借用語が最も古い層に属することを示す 0 の値から最も新しい層に属することを示す 1 の値まで変動する。表 1 に漢語を、S が 0 の値、0 と 1 の間の値、1 の値を取る区分に従って載せる (1 地点のみのスコアしかない語は除外した。語ごとに基準の数が異なっていることに注意されたい)。

表 1 総合新古スコア S に基づく漢語の分類

S = 0 (基準が多い順)	0 < S < 1 (数値が小さい順)	S = 1 (基準が少ない順)
砂糖, 包丁, 厄, 菓子, 正月, 彼岸, 風儀, 祝儀, 掃除, 武士, 椰子, 意地, 地, 字, 道具, 米	大事, 細工, 大工, 運氣, 恩義, 夏至 ¹² , 根気, 雑炊, 難儀, 芭蕉, 次第, 位牌, 菜, 生姜, 是非, 代, 冬至, 飯米, 野菜, 厄介, 師匠, 上納, 嫡子, 臣下, 百, 脈, 欲, 卓, 挨拶, 果報, 精霊, 吟味, 上等, 勝負, 七月, 焼香, 菊, 癩, 徳, 根性, 水囊, 貧相, 毒, 天井, 辣韭	世間, 利息, 衣装, 客, 信用, 勘定, 義理, 牛蒡, 問答, 学校, 地獄, 不足, 後生, 蠟燭, 苦勞, 弥勒, 理屈

S = 0 の漢語は最も古い層に属すると見られる。これらの漢語については、南琉球祖語 (および琉球祖語) にまで遡る可能性があり、その場合、方言間での規則的なアクセント対応が予測される。実際、多くの語について、琉球祖語に再建される A, B, C (松森 2000, 2012) の各系列 (アクセント類) との対応が認められる。アクセント情報を含むデータから、南琉球で「砂糖 (C), 包丁 (C), 厄 (B), 菓子 (C), 正月 (C), 彼岸 (C), 風儀 (A), 掃除 (C), 椰子 (C), 意地 (A), 地 (B), 道具 (C), 米 (A)」の型が再建され、これらは北琉球諸語のアクセントとも概ね対応する¹³ことから、琉球祖語に遡る、すなわち琉球祖語の段階で借用された語彙と推定される。これに対し、「祝儀 (X), 武士 (X), 字 (X)」のようにアクセントの規則的な対応が見られない語もある。これらの語は指標となる音変化 (*i > ī や *i > ɨ) がいずれの方言でも新しいもののため、借用時期がそれほど古くない可能性がある。

S = 1 の漢語は最も新しい層に属すると解釈できる。従って、方言間でのアクセント対応が不規則なことが予測される。実際、「学校」(宮古 C, 石垣 BC, 鳩間 BC, 波照間 A, 与那国 A) のように、方言間のばらつきが激しくアクセントの再建が困難な語が多く、各方言で無標なアクセント型で取り入れられたものと思われる。

以上より、南琉球において、漢語の借用時期として少なくとも 3 つの層を認める必要がある。層 1 は S = 0 となる漢語で、南琉球祖語 (あるいは琉球祖語) に遡るもの、層 2 は 0 < S < 1 となる漢語で、南琉球諸語が分岐して後に入った比較的古いもの、層 3 は S = 1 となる漢語で、南琉球諸語に比較的新しく入ったものとなる。借用時期の絶対年代については不明なものの、層 3 に「弥勒」が含まれることを

¹¹ *-au# > -a# は全ての方言に生じていて、*satau > sata, *paucjau > paucja は祖語での音変化のようにも思われるが、方言によって適用される語が違うことから、本発表では平行変化と考え、借用時期の古さによるものとする。

¹² *kaci のような形式との対応で計算したが、語音からして日本語の *gesi には対応せず、中国漢語風の *kaacii のような形式を考えるべきである。「冬至」も首里方言に tuuzi と tunzii 「冬至の祭り」があり、後者には *kaacii に倣って中国漢語風の *toNzii のような形式が考えられる。与那国方言 tundi などは *toNzii に対応する可能性が高いと思われる。

¹³ RDB 中の与論方言、今帰仁方言、伊江島方言、首里方言のデータを参照した。

考えると、層3は南琉球に弥勒信仰が広まってから（琉球王国の支配下に入ってからか）の語彙で、層2はそれ以前に北琉球諸語から断続的に借用されたものと考えられる。

5. まとめと課題

本発表では、南琉球諸語に見られる漢語について、音対応をもとに漢語の借用時期および音変化の相対年代を推定した。筆者らが構築している RDB と個別の調査結果をデータとして用いた結果、漢語群に3つの借用年代層1~3が認められることを示した。

本発表の意義は次の2点と考える：[1] 漢語のみならず和語にも借用語は含まれることが想定されるが、和語の場合は伝承語か借用語かの見極めが困難で、音変化との関係の議論が循環論になる可能性があるのに対し、漢語は全て借用語のため、音対応のずれを音変化と借用時期の相対年代の問題に単純化できるという漢語の利点を利用した。[2] データベースに基づく研究の有用性と、客観的な指標によってテスト可能性のある分析結果を提示した。問題点として、指標の重み付けや相対年代が考慮されていない（総合新古スコアは全ての指標を対等に処理している）、音素配列の制約など、音変化以外の要素を考慮していない、といったことがある。今回の結果をもとに、音変化の情報を充実させ、データベースを拡充することで、借用時期の推定の精度が向上することが期待される。今後の課題としたい。

【資料】分析に使った漢語語彙リストと再建形（125語）：

挨拶 (aisatu), 意地 (idi), 衣装 (isjau), 位牌 (ipai), 運氣 (uNki), 恩義 (oNgi), 菓子 (kwasi), 学校 (gakkau), 合点 (gatteN), 果報 (kwapou), 勘 (kaN), 勘定 (kaNzjau), 頑丈 (gaNdjou), 菊 (kiku), 客 (kjaku), 義理 (giri), 吟味 (giNmi), 公界 (kugai), 苦勞 (kurau), 夏至 (kaci), 家内 (kenai), 香 (kau), 甲 (kou)【cf. 石崎(2004: 34)】, 香炉 (kauro), 後生 (gosjau), 五体 (gotai), 骨 (kotu), 牛蒡 (goNbau), 胡麻 (goma), 御礼 (gorei), 根気 (koNki), 根性 (koNzjau), 菜 (sai), 細工 (saiku), 沙汰 (sata), 砂糖 (satau), 山椒 (saNsju), 地 (di), 字 (zi), 地獄 (digoku), 磁石 (zizjaku), 師匠 (sisjau), 次第 (sidai), 七月 (sitigwatu), 癩 (sjaku), 邪魔 (zjama), 祝儀 (sjuugi), 首尾 (sjubi), 生姜 (sjauga), 正月 (sjaugwatu), 焼香 (sjoukau), 上等 (zjautou), 上納 (zjaunau), 相伴 (sjauban), 勝負 (sjoubu), 醤油 (sjaju), 精霊 (sjaurjau), 卓 (sjoku), 書物 (sjomotu), 地炉 (diro), 臣下 (siNka), 信用 (siNjou), 髓 (zui), 水囊 (suinau), 清明 (seimei), 世間 (sekeN), 節 (setu), 是非 (zepi), 掃除 (saudi), 雑炊 (zousui), 相談 (saudaN), 素麺 (saumeN), 代 (dai), 大工 (daiku), 大事 (daizi), 茶 (cja), 嫡子 (cjakusi), 亭主 (tejsju), 天 (teN), 天井 (teNzjau), 唐 (tau), 胴 (dou), 道具 (daugu), 冬至 (touzi), 豆腐 (taupu)【cf. 石崎(2004: 39)】, 灯籠 (touro), 徳 (toku), 毒 (doku), 土用 (dojou), 難儀 (naNgi), 人数 (niNzju), 年頭 (neNtou), 念仏 (neNbutu), 拝 (pai), 芭蕉 (basjau), 罰 (bati), 飯米 (paNmai), 彼岸 (pigaN), 百 (pjaku), 賓頭盧 (biNzuru), 貧相 (piNsau), 風儀 (puugi), 武士 (busi), 不足 (pusoku), 不用 (pujou), 坊主 (bauzu), 包丁 (paucjau), 米 (mai), 魔法 (mapou), 脈 (mjaku), 弥勒 (miroku), 問答 (moNda), 菓缶 (jakkwaN), 厄 (jaku), 野菜 (jasai), 椰子 (jasi), 厄介 (jakkai), 油断 (judaN), 用所 (jouzjo), 欲 (joku), 辣韭 (rakkjau), 理屈 (rikutu), 利息 (risoku), 蠟 (rau), 蠟燭 (rausoku)

記号

* (再建形), # (語境界), A::B (AとBが対応する), A>B (AがBに変化する), A<B (AがBに由来する)

参考文献

- 石崎博志 (2004) 「琉球の漢語語彙におけるオ段長音について」『日本東洋文化論集』10: 29-55.
上野善道 (2006) 「日本語アクセントの再建」『言語研究』130: 1-42.
沖森卓也・肥爪周二 (2017) 『漢語』東京；朝倉書店。
狩俣繁久 (2008) 『琉球八重山方言の比較歴史方言学に関する基礎的研究』平成17年度～平成19年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）研究成果報告書
かりまたしげひさ (2012) 「琉球列島における言語接触研究のためのおぼえがき」『琉球の方言』36: 9-28.
金田一春彦 (1980) 「味噌よりは新しく茶よりは古い—アクセントから見た日本祖語と字音語—」『月刊言語』9(4): 88-98.
服部四郎 (1978) 「日本祖語について・6」『月刊言語』7(8): 88-96.
—— (1979) 「音韻法則の例外—琉球文化史への一寄与—」『日本學士院紀要』36-2: 53-79.
平山輝男 編 (1988) 『南琉球の方言基礎語彙』東京；桜楓社。
松森晶子 (2000) 「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発—沖永良部島の調査から—」『音声研究』4(1): 61-71.
—— (2012) 「琉球語調査用「系列別語彙」の素案」『音声研究』16(1): 30-40.